



Title	山我哲雄 『一神教の起源』 (筑摩書房、二〇一三年) : 書評と質問
Author(s)	堀, 雅彦
Citation	基督教學, 50, 51-55
Issue Date	2015-09-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/62362
Type	article
File Information	04 hori.pdf



[Instructions for use](#)

山我哲雄

『一神教の起源』 (筑摩書房、二〇一三年)

山我哲雄氏は、これまで旧約聖書学・キリスト教学の分野で精力的に研究成果を公刊してきた。その成果は、その道の研究者のみが読める専門書から一般入門書まで、じつに幅が広い。このたび刊行された『一神教の起源』は、専門書の水準を保ちつつ一般読者にも興味をもつて読める稀有な一書である。本学会では、こうした研究成果を多面的に紹介し評価するべく、書評という形式ではなく、学術大会におけるシンポジウムという形で学会員の間で幅広く検討したいと考えた。以下では、残念ながら当日学会員の間で出されたすべての発言は収録できなかったが、二人の書評者と山我氏との間で交わされた議論を掲載する。(司会・宇都宮輝夫)

書評と質問 ①

堀 雅彦

本書の書名である「一神教の起源」には、二つの主題が含まれている。一つは、広い意味での一神教としてのヤハウエ信仰そのものの起源という主題であり、もう一つは、それがいかにして「厳密な意味」での唯一神教へと転換していったか、という主題である。

「一神教の起源」という大問題をこのように分節化して問うことの必要性は、聖書・キリスト教研究者にとつてはすでに自明のことかもしれないが、本書の読者として想定されている一般の読書人にとつては、決してそうではない。著者はそのような事情を十分にふまえ、ユダヤ教やキリスト教、イスラームはそもそもどのような意味において「一神教」なのか、という素朴な（しかし決して軽くはない）問いにも答えるような仕方で、議論を進めている。

その面から言えば、本書は高度の専門的見地から書か

れた良質の概説書としての性格を持つが、その叙述は上質な推理小説のような、とても評すべき読み物としての魅力をもそなえている。それはひとえに、著者自身が本書において、単に教科書的な解説にとどまることなく、先行研究を十分にふまえつつもかなり大胆な（と、少なくとも門外漢の私には思える）仮説の提示を試みているためだろう。

その仮説を支える全体的な構図として、著者は聖書的一神教の成立・変容に関わる五つの「信仰革命」を見出している。すなわち、拝一神教としてのヤハウエ信仰の成立（第一の革命、前十三世紀以降）、民族神としてのヤハウエから世界神としてのそれへの転換（第二の革命、前八世紀）、ヨシア王らによる排他的ヤハウエ信仰の復興・強化（第三の革命、前七世紀後半）、民の罪による破局の理解とヤハウエの全能性の強調（第四の革命、前六世紀）、第二イザヤによる唯一神観の宣言（第五の革命、同じく前六世紀）である。これら五つの革命のうち、先述の第二の問い、すなわち厳密な意味での唯一神教への転換は、（もちろん先行する一連の革命を助走としつ

つも）最終的には第五の革命において達せられたと著者は見ており、これを「ある意味で人類宗教史上最大の思想的・信仰的革命」とも評している。

本書を通して著者が最も大胆な仮説に踏み込んでいるのは、この第五の革命をめぐる部分である。私自身、著者の問題関心に引き寄せられ、様々なことを考えさせられた。多くの読者もまた、それぞれに自前の思考を誘発される体験をしたものと思う（それが良質の学術書の必須条件であることは言うまでもない）。本書に学び、感銘を受けた点は数多あるが、紙幅の関係上、以下はむしろ、そのような思考の中で生じたいくつかの疑問のみを記したい。

まず、第二イザヤによる「一点突破」（三五六頁）によって生じたとされる第五の革命について、その受容、波及の側面が、少なくとも本書の範囲では十分に語られていない。革命を革命たらしめるのは、その前史のみではなく、それ以後の歩みであるように思う。イザヤの思想それ自体が「革命的」なものであった、との主張が妥当だとし、ても、それが歴史上、どの程度まで不可逆的な変化を現

実の世にもたらしたのかについては、なお疑問が残る。

もちろん、著者がこの革命を「民族宗教」としてのユダヤ教から「普遍的な世界宗教」としてのキリスト教への発展の可能性を開いたものとして見ていること、また、おそらくはその視点に立つからこそ、それを「人類宗教史上最大の「革命」とまで呼んでいることは明らかである。その意味では、第二イザヤの革命性は、後のキリスト教、あるいはイスラームの成立と拡大の歴史から見ても言うまでもない、と言えるかもしれない。

しかしながら、第二イザヤの思想がそれほどに画期的なものであったとすれば、それがキリスト教の成立を準備したのみならず、その後のユダヤ教自体を「普遍的な世界宗教」へと変容させる可能性は無かったのか、あるいは、実はそのような変容が何ほどか具現していたのではないか、といった問い直しもまた、必要に思われる。個人的には、その後のディアスポラの拡大や、非ユダヤ人ユダヤ教徒の出現といった歴史的事実から見て、ユダヤ教もまた、キリスト教とは別な意味において「普遍化」や「世界」化の道を行んだ、との見方も出来るのでは

ないかと思う。

このような疑問は、著者の専門である聖書学やキリスト教史の観点からは非常識な問いかもしれない。しかし、宗教学の見地に学んできた身としては、第二イザヤの革命性に対する評価が、いわゆる価値中立的な視点というよりは、著者自身の拠って立つキリスト教的観点から行われている、との印象はいかにしても抜きがたい。もちろん、そのこと自体は、必ずしも本書の価値を損なう欠点ではない。ただ、第二イザヤによる革命を観念上の「突然変異」や「考え方の枠組み（パラダイム）そのものの転換」など、自然科学や科学史上の概念を援用して性格づける議論の進め方には、読者に対して過度の客観性を印象づけるきらいがあるのではないかと思う。

厳密な意味での唯一神観は「他の神々の存在そのものを原理的に否定する」ものだと著者は繰り返し述べている。しかし、第二イザヤの言葉に読み取れるのは、著者自身も認めるように、一種の「レトリック」としての神の唯一性の宣言である（三五五、三五八頁）。それはちょうど、恋する人が「この世にはあなたしかいない」と手

紙に記すのにも似て、ただ「あなた」との関係の唯一性をレトリカルに謳い上げるものとも思える。そのような関係の唯一性を生きる者にとって、他の存在はまるで眼中にないにちがいない。この場合、他の存在が「原理的に否定」されているのかどうか、つまり関係の唯一性をこえてさらに存在の唯一性が主張されているのかどうかは、恋愛の現実においてと同様、信仰の現実においても必ずしも明らかではないのではないか。

もちろん、信仰の問題を恋愛になぞらえることには多くの反論があるろう。聖書解釈の常識からすれば、第二イザヤが宣言しているものが恋愛のようになりそのめ関係であるはずがない、あるいは、その言葉が恋文のような言葉の彩にすぎないわけがない、という反論も当然あるだろう。しかし、私が問いたいのは、その種の断定が、真に第二イザヤ書の言葉そのものから引き出せるかどうかである。その断定を支えるのは、第二イザヤの、ではなく、むしろそれを解釈する者の信仰ではないか。

著者が適切にも一神教と多神教という区分に対して指摘するのと同様に、拜一神教と唯一神教の区分もまた、

おそらくは一個の「理念型」にすぎないのだろう。「厳密な意味での」唯一神観は理念の中にしかなく、それに「原理的」な内容を与えるのは、何らかの神学であり、つまり何らかの信仰を含む言説ではなからうか。そのような神学が第二イザヤという預言者による「一点突破」によつて一挙に定立された、という著者の大胆な仮説の説得力は、決して脆弱なものではない。しかしながら、それがもう一つの可能性を完全に排除するほどに決定的なものだと断定することは、少なくとも本書の論述だけでは難しいと言わざるをない。もう一つの可能性とはすなわち、第二イザヤという預言者が、一挙に、ではなく、むしろ第二イザヤ書という預言書を中心とする聖書解釈の歴史的蓄積が、次第にそのような神学を成立させるに至つたという可能性である。それはまた、著者自身、そのような解釈学的「前史」を持つ神学に立脚しつつ、第二イザヤによる「革命」を（単に発見しているというよりは）自ら再構成しているのではないか、という可能性でもある。

以上、疑問点のみを抜粋して記ささせていただいた。本

書評と質問 ②

桑原俊一

書の真価に対する理解と言及を欠いた瑣末な評言にすぎない、との声もあるかもしれない。しかし、本書は決して聖書研究、キリスト教研究に通じた読者のためだけに書かれたものではなく、キリスト者のためだけに書かれたものでもない。近年、聖書やキリスト教に関してこのように広い読者を想定して書かれた書物は明らかに増えているが、実際にそのような開かれた叙述になりえている書物は、極めて少ない。しかも、その特質が学術的な誠実さを犠牲にすることなく成立しえている書物となると、その数はさらに少なくなる。本書はまぎれもなく、それらの特質を兼ね備えた稀有な一冊である。一神教の成立史がいかにも「謎解き」のロマンに満ちたものであるかをここまで平易に伝えた書物は、他にはそうあるまい。浅学を省みず、評者が私見を記したくなったのも、そのような本書の魅力あればこそである。本書を火付け役として、今後、専門の別をこえた謎解きの議論が活性化されることを期待したい。

(以上)

本書は、あとがきにもある通り二〇〇五年、公共哲学京都フォーラム主催の一神教をめぐる研究会に著者が発題者の一人として招かれたことが端緒となって執筆された。このフォーラムの発題と討論は大貫隆・金泰昌・黒住真・宮本久雄編『一神教とは何か―公共哲学からの問い』（東京大学出版会、二〇〇六年）として出版され、著者の発題部分は「旧約聖書の宗教はいかなる意味で、〈一神教〉であったのか」（三三頁―七八頁）という表題で、発題を受けての討論（七九頁―八九頁）とともに所収されている。

本書全体は、第一章「一神教とはなにか」、第二章「ヘイスラエル」という民」、第三章「ヤハウェという神」、第四章「初期イスラエルにおける一神教」、第五章「預言者たちと一神教」、第六章「申命記と一神教」、第七章「王国滅亡、バビロン捕囚と一神教」、第八章「第二イザヤ」